

国際性を育む観点

社会経済のグローバル化が進展するこれからの社会を見据え、子どもたちに国際性を育むことは、学校教育の重要な責務の一つです。

私は、国際性を育む観点には、外国語によるコミュニケーションはもとより、次の三つがあると捉えています。

1 公正・公平な態度

互いが同じ人類の仲間であるという自覚をもち、誰に対しても偏見や差別意識をもつことなく、公正、公平に接すること。

2 伝統・文化の理解・尊重

我が国や郷土の伝統・文化を世界に発信できる資質や能力をもつとともに、他国の伝統・文化を理解して尊重し、互いに文化交流を行うこと。

3 論理的な思考・表現

さまざまなものの見方や価値観があることを踏まえ、物事を多様な観点から論理的に考察し、自分の考えを根拠に基づく説得力をもった日本語で表現すること。

(次号に続く)



言われているうちが華

福聚山 慈眼寺住職 大峯千日回峰行大行満大阿闍梨 塩沼 亮潤

「言われているうちが華」という言葉があるように、何度言っても言うことをきかない人、みんなが困るようなことをする人は、やがてお師匠さんや先輩から、何も言われなくなります。言われなくなると不思議なもので、ハッと気づき、自ら態度を改める人もいます。たとえ嫌なことを言われても、しっかりと耳を傾け、素直に受け入れる。これが自分磨きの基本です。

出典：「寄りそう心」 塩沼亮潤著（プレスアート）

※ 公私を問わず、指摘を素直に受け止めることの大切さに改めて気付かされました。